

## 第4話 明治という国家の青写真を求めた岩倉使節団の旅

昭和を軍部暴走の『鬼胎の時代』と称した作家の司馬遼太郎は、「明治という国家は多くの欠点を持ちつつも、誠に偉大であった」と最大限の評価をしております。

「明治維新は“国民国家”を成立させて、日本を植民地化の危険から助け出すという、ただ一つの目的のために、一挙に封建社会を倒した革命で、“尊皇攘夷”の合言葉こそがそのエネルギーであった。然し幕府を倒したものの、国家をどう設計するかという、しっかりした青写真は最初からあったわけではない」と司馬はいう。

その青写真たるべき“この国のかたち”を求めて、明治4年の廃藩置県を断行した直後に、通商友好条約締結国である米欧諸国への回覧の旅に出たのが岩倉使節団であった。

全権大使岩倉具視と副使に木戸孝充（長州）、大久保利通（薩摩）、伊藤博文（長州）、山口芳尚（佐賀）ら明治維新を成し遂げた要人や有力な各省の理事官、留学生を含めて107人を、ごっそり引き連れての使節団派遣は、明治初期の新政府の安定性の危ぶまれる時期でもあり、ある意味では無謀とも言えるものでした。それだけに、一刻も早く国民国家を創り、西洋文明を取り入れて、西洋列強の仲間入りをするための国づくりが喫緊の課題であったといえましょう。

結果的に、明治国家はアジアで最初の近代的国民国家の創設に成功しましたので、やはり冒険というより、一大壮挙というべきでしょう。アジアが未開国として欧米から差別されていた時代に、帰国後、大久保利通率いる内務省を中心にして、いち早く、産業革命を取り入れた殖産興業や資本主義の導入に励み、明治22年には、大日本帝国憲法の制定に漕ぎつけ、立憲主義や議会制の導入にも成功しました。

考えて見れば、明治維新（1868年）や岩倉使節団派遣（1871年）は世界史的にみても非常に特異な、且つ絶妙なタイミングの時代背景があったことが分かります、

一つは蒸気船、鉄道、電信、郵便の発達で地球上の時間と空間が抹殺された時期に当たります。米国との間に太平洋定期船航路が1867年に開設されます。英国やフランスとの間にも、スエズ運河（1869年開通）経由の定期航路が始まります。使節団回覧の直前に、世界の海が商業的に丸く繋がりました。アメリカ大陸横断鉄道が敷かれ米国西岸から東岸が鉄道で結ばれたのが、使節団訪米の2年前の、1869年でした。

電信では、国際電信条約が、1865年にパリで結ばれて、大西洋と太平洋に海底ケーブルが敷かれ、シベリア経由の電線で、使節団が帰国するまで（1873年）には欧米と長崎までがすでに繋がっていました。万国郵便連合条約は1874年に結ばれて、それ以前でも使節団と留守政府の交信も郵便船と電信で遅滞なく行われていました。

日本でも1871年に郵便制度は開始されました。つまり、交通、通信で世界は一つになった時代背景があつて使節団のスムーズな回覧を可能にさせ、成功させたのです。まさにジュース・ベルクの『80日間世界一周』の小説が現実化した時代でした。英国のトーマス・クック旅行社は、世界一周団体旅行を1872年に売りだしました。

二つ目は、西洋諸国においてさえも、国民国家としての統一国家は、勃興期でした。米国の南北戦争が終わったのは、1865年でした。その結果、米国は統一され、共和国として発足しました。イタリアが統一したのは、1861年です。オーストリア・ハンガリー二重帝国の成立は1867年です。普仏戦争に勝利してドイツ帝国が成立したのは1871年です。フランスは普仏戦争に敗けて、パリコンミュンが起り、その結果第二帝政が崩壊し、ナポレオン三世が国外に追放されて、第三共和制に移行しました。使節団はイギリスで亡命中のナポレオンを見かけており、パリ滞在中にナポレオンの逝去を知りました。イギリスは絶頂期にあつたヴィクトリア女王が夫君アルバート公の逝去のあと10年間の服喪を宣言したことから、君主専制政治から、議会政治への移行期にありました。そうした、生々しい政情や国により様々な政治体制があることを使節団はつぶさに見聞して帰国しました。

三つ目は、使節団が訪問したイギリスは産業革命を謳歌していました。使節団は、産業の機械化と貿易こそが西洋富強の根源だと気付きます。そして、西洋と日本との差は、欧米の産業が急進展した、僅に40年程だと認識します。そして、財産権や私的所有権の大切さに気付きます。マルクスの資本論が出たのが1867年です。帰国後、長い苦闘のすえに、不平等条約の解消が実現して、日本がやっと欧米列強の仲間入りが出来たと実感したのが1911年（明治44年）のことでした。まさに40年後の事でした。

そんな世界の情勢を的確に見極めて、明治のこの国のかたちの形成に役立たせたのが岩倉使節団の役割であり成果でした。

使節団は、一緒に西洋の文明や富強の由来の実態を見聞して帰国し、目指すべき国のかたちへの共通認識が得られたことが重要です。つまり、国家の目指すべき青写真が共有されたのです。とりわけ殖産興業に精力的に取りかかりました。例えば鉄道網の全国展開、海運、造船、製鉄など諸基幹産業の育成、人材の育成のための教育制度、帝国大学による官僚の養成（司馬は大学教育は人材の配電盤と称している）、民法、商法、刑法の制定に努めます。そして明治22年（1889年）の大日本帝国憲法発布の実現に漕ぎつけました。この国のかたちの一つの完成形です。

もちろん、その推進方法が有司専制的、開発独裁的に行われたことや藩閥政治だったとの批判はありますが、アジアの植民地化が続く時代背景を考えると、発展途上国に合った一番効率の良い文明開化の方法だったとも言えそうです。

因みに、司馬遼太郎は「明治という国家は江戸時代の遺産で出来た」と言っております。私もまったく同感です。「幕藩体制は280余の藩があって、それぞれ特性のある藩であって、人材も多様性に満ちていた。それらの人材が新政府に徴士、貢士として集まって、様々な貢献をした。例えば、薩摩は、本質を捉える司令官タイプ。長州は権力操作が上手で、官僚機構を完成させた。土佐は官より野に追って、自由民権運動に没頭した。肥前は人材の供給源で、とりわけ理工に長けていた。更に、国民の民度が高かった。勤勉で、国家の制度に従うので、上意下達が容易な国民性であり、正直で私利私欲でない公共の精神があった。滅私奉公の武士の精神と、職人の実直な精神を持ち合わせていた。識字率も欧米水準で、西洋文明の受容への民度が整っていた。明治はリアリズムの時代で、透き通った格調の高い精神に基づくリアリズム社会であり、日本国家建設という公共に奉仕精神に満ちていた。明治初年の西洋文明受容期の日本は、一個の内燃機関であった。次から次へと、あらゆる方面に爆発するかの如く燃え盛って、西洋文明の受容に務めた」と司馬は述べています。

その先導役を果たしたのが、明治の早い時期での岩倉使節団の米欧体験にあったといえます。明治という国家の「国のかたち」はこうして形成されました。

しかし、江戸の遺産である公共の精神に満ちた、江戸生まれの武士の魂を持った人材が途絶えた頃から、明治も次第に輝かしさを失っていったように思うのは私の偏見でしょうか。 以上